

ののラ・チッタ・フトウーラのののののの

LA CITTÀ FUTURA

(未来都市)



東京グラムシ会
会報 第59号

TOKYO GRAMSCI SOCIETY BULLETIN No.59

(2014)

目次

Table of Main Contents

☆グラムシ研究

☆Research of Gramscian thought

グラムシ『獄中ノート』における
クローチェ哲学との格闘と展開

Arguments and development of Gramsci vis-à-vis
Croce's philosophical thought

松田 博……1

Hiroshi Matsuda……1

☆海外のマルクス主義研究関連資料

☆Study about Western Marxism from abroad

マルクス主義におけるレーニン
『哲学ノート』の画期的意義と限界

Epoch-making significance and limits of
Lenin's philosophical Notebook

ケヴィン・B・アンダーソン……5

Kevin Anderson……5

☆随想

☆Essay

中国東北部、美しい緑の街
——長春滞在の一瞥

On my visits in Changchun, a northern-west
beautiful city in China

黒沢惟昭……20

Nobuaki Kurosawa……20

マルクス主義哲学研究の資料

マルクス主義におけるレーニン 『哲学ノート』の画期的意義と限界

〈原題：批判的評価：80年後のレーニンのヘーゲルとの出遭い〉

ケヴィン・B・アンダーソン

(北イリノイ大学社会学部)

訳：小原 耕一

この論文ははじめ『社会における科学』(第59号・1995年)に発表された。同年、アンダーソンはイリノイ大学出版局から『レーニン、ヘーゲル及び西欧マルクス主義』を刊行している。この著書の第1章を要約・紹介したのが以下に訳出する論文と考えてさしつかえない。アンダーソンはメキシコ亡命時代のトロツキーの秘書をつとめたことのあるラナ・ドゥナイエフスカヤのヘーゲル的マルクス主義に共鳴し、合衆国マルクス主義・人文主義委員会のメンバーとなった

「レーニンは、特にヘーゲル弁証法の“核心”(“矛盾はすべての運動と生命の源泉である”)と同じくヘーゲル論理学を頼みとすることによって真のマルクス主義を刷新した…。こうして、まさにレーニンによって復活された正統派マルクス主義は、ヘーゲルの学識を前提として成り立っていた。[…](エルンスト・ブロッホ)

「彼は1914-15年までヘーゲルを真剣に読まなかったし研究しなかった。また、人がこのことを客観的に考察するならば、弁証法に関するノートと『唯物論と経験批判論』のあいだにはそのトーンと内容において大きな違

いがあることに気づくのである。レーニンの思考は柔軟で、生き生きとし、…一言でいえば、弁証法的になった。インタナショナルの崩壊後、1914年まで、レーニンは弁証法を完全に理解していなかった。…ここでわれわれは、長い間「ヘーゲル・ノート」を脇においたまま『唯物論と経験批判論』を重視したスターリン主義者たちがこのノートについて深い沈黙を守っていた意味を知るのである」(アンリ・ルフェーブル)。

「レーニンが哲学科学として“弁証法自体”を強調したことは、他のすべてのポスト・マルクスのマルクス主義者たちからレーニンを

引き離すことになったが、これはロシア革命までではなく、権力獲得後もそうであった。…1914 - 15 年のヘーゲル研究からレーニンが獲得したもののもっとも明白なあらわれは、ヘーゲル弁証法は“即自及び対自的に”研究されなければならない、ということであった。…しかしながら、ヘーゲル弁証法——その「ヘーゲルの著書《論理学》の摘要」との直接の出遭いをレーニンが大事にしたことは、ドイツ社会民主党だけでなく第二インタナショナル全体が深く沈み込んでいた経済主義的泥沼の深さを示している。革命家たちも同じような〔経済主義の〕立場に立っていたからである」(ラヤ・ドゥナイエフスカヤ)。

80 年まえの 1914 年 8 月に勃発した第一次世界大戦は、万人の幸福へとまっしぐらにすすむ進歩への自由主義の近代主義的確信を掘り崩し始めた。新カント哲学及び実証主義の進化の図式によって哲学的に影響を受けた既成のマルクス主義は、世界でも最も“先進的”で民主主義的な資本主義諸国の心臓部で暴力と破壊が復活したことに、ほとんど無防備の状態にあった。第 2 インタナショナルの分裂という、マルクス主義をとらえた最初の大きな危機の中であって、国際主義の美しい言葉は、民族的排外主義に直面して勢いを失いはじめた。よく知られていることだが、ローザ・ルクセンブルク、カール・リープクネヒト、レオン・トロツキー、そしてヴェ・イ・レーニンを含む少数派は、戦争に断固反対し、プロレタリア国際主義の継続を訴えた。この少数派の中の一人、レーニンは、さらに一步をすすめた。戦時中のスイスへの亡命生活の機会に、レーニンは、自己の根本的な理論的前提を再考する中で、“すべての弁証法の源泉たるヘーゲルの‘矛盾’”としてマルクスが『資本論』の中で言及した問題に立ち返ったのである。

1914 年 9 月初め、レーニンは、ヘーゲルの傑作『論理学』を研究した。マルクス主義運動の中心的な指導者であったレーニンの同時代人のうち、カール・カウツキーもルドルフ・ヒルファールディングも、ルクセンブルクもトロツキーも、ヘーゲルのこの労作についてこれほど力を集中したものはいなかった。また、レーニンの哲学的教師でもあったゲオルギー・プレハーノフでさえ、そのヘーゲル論はヘーゲルの社会・歴史関連著作に限られ、弁証法に関するヘーゲルの中心的著述について論じてはいなかった。レーニンの「ヘーゲル《論理学》の摘要」は、英語版著作集で約 150 頁に及ぶものである。また 1915 年以後ヘーゲルについての覚書は 100 頁余りに及んでいる。レーニンの『哲学ノート』は主に、ヘーゲルからのドイツ語の長い抜書き、そのあいだにコメントや欄外書き込み、さらに、レーニン自身による弁証法についての概念化などからなっている。その上レーニンは、この時期に、5 頁の断片的なエッセイ「弁証法の問題について」を書いている。

「ヘーゲル《論理学》の摘要」は、レーニン没後 5 年を経た 1929 年に、レーニン資料集〔レーニンスキー・ズボールニク〕第 9 巻として、はじめてロシア語で刊行された。1930 年には、ヘーゲルに関する追加の覚書として、哲学問題に関する他の資料とともに刊行されたが、そのうち 200 頁は、1914 - 15 年以前に書かれたものであった。1933 年にはこれらの二つの巻が『哲学ノート』のタイトルで 1 巻に収められ出版された。これらの巻やその後のスターリン版では、タイトルも、また 1914 年以前の無関係の資料と 1914 - 15 年のヘーゲル・ノートとが組み合わせられていたことも、1914 年以降のレーニンのヘーゲルへの関心の大きさを控えめに扱うのには役立った。この伝統にならって、現在の『哲学ノート』英語版に付けら

れたモスクワのマルクス・レーニン主義研究所の6頁の序文は、レーニンのヘーゲル研究の問題にあてられているスペースは半ページにも満たない短いものにする工夫がほどこされている。

レーニンの「ヘーゲル・ノート」は1932年にドイツ語で、1938年にフランス語で、1958年に英語及びイタリア語で出版された。アンリ・ルフェーブル、エルンスト・ブロッホ、C.L.R. ジェームズ、ラヤ・ドゥナイエフスカヤ、ルチオ・コレッティ、イリング・フェッチャー、そしてルイ・アルチュセールのような指導的マルクス主義理論家もまた、様々な観点からではあるが、このノートについて詳しくコメントしている。しかしながら、1914 - 15年以降のレーニンのヘーゲルに関する覚書や、その覚書がレーニンの思想やその後のマルクス主義理論に及ぼしたインパクトは、驚くほど漠然としたままにとどまっている。その理由は部分的には、アンリ・ルフェーブルが指摘しているように、スターリン主義の御用イデオロギーには、そのような考え方がはいる余地がほとんどなく、そのかわりに、レーニンの生硬なまでに唯物論的な初期の哲学著作『唯物論と経験批判論』のほうの方がより好まれたためであろう。たとえば、800頁の国際出版社版のアンソロジー、レーニン1巻著作集(1971年)には、1914 - 15年の「ヘーゲル・ノート」からのものは何も見出すことができない。だがこれはリベラルな研究書についても言えることだ。ロバート・タッカー編集のライバル双書、レーニン・アンソロジー(1975年)は、750頁のうち「ヘーゲル・ノート」についてはたった4頁しか含まれていない。標準参考図書についても同じことが言える。多くの項目を指導的なマルクス主義学者たちが執筆しているトム・ボットモアーのマルクス主義思想事典(1983年)も、デイヴィッド・ミラーのさらにリベラル傾向のブラック

ウェル政治思想百科事典(1991年)も、レーニン関係の相当詳しい項目のどれにもレーニンのヘーゲル研究についての言及はない。1960年代以降出版されたレーニンの生涯と思想全体を扱った4つの研究書のうちの2つ(Harding 1978-81, Cliff 1975-79)は、レーニンの「ヘーゲル・ノート」を取り上げさえしていない。他の2つ(Liebman 1975, Service 1985f)は、「ヘーゲル・ノート」について興味深いがあまりにも短すぎる論議しか紹介していない。このように、レーニンのヘーゲル論を読んだり再読したりすることは、その著作の標準的な解釈に逆らってレーニンを読むことをも意味するわけである。

1914 - 15年のレーニンによるヘーゲル読解は、現代の我々にとって、少なくとも4つの理由で重要である。第一の理由は、主要なマルクス主義理論家による紛れもなく真剣で、興味深く、かつ独創的なヘーゲル読解だからである。第二の理由は、帝国主義、国家、民族解放、そして革命に関して1914年以後のレーニンのよく知られた著述の方法論的な基礎についての重要な洞察を我々に示してくれているからである。第三の理由は、レーニンのヘーゲル読解がジェルジ・ルカーチのような指導的「西欧マルクス主義者」が1920年代以降しばしばヘーゲル的マルクス主義[Hegelian Marxism]と命名されたものを展開するように導いた部分的回路を形成しているからである。第四の理由として、レーニンのヘーゲル論は、若干の重要な欠陥にもかかわらず、それが陳腐な教条主義というよりもむしろ生きた思想の統一体であるとすれば、いかにしてマルクス主義があらゆる危機に際してその理論的諸前提を再吟味しなければならないかを示す、今日的な範例を提供しているからである。このエッセイで私は、これらの理由のうちの第1の理由について、最後の第4の理由にも触れながら、論じることにしよう。

〈ヘーゲル研究からレーニンが達成したものは何か〉

「ヘーゲル・ノート」でレーニンが達成したことを理解するためには、彼の初期の生硬な著作『唯物論と経験批判論』と対比してこれらのノートを見ることがだいじである。実存主義的マルクス主義者モーリス・メルロー・ポンティはかつて、この著作（『唯経論』）を“カント以前 [pre-Kantian] のもの”と呼んだが、その際彼は、そのような（カント以前の）視点から、いかにして“マルクス主義的弁証法を導入することができたのか？”とするどく指摘した（1955年）。何人かの評者（アルチュセール 1971年、ルーベン 1977年）は、現代マルクス主義としてこの著作（『唯経論』）を救い出そうと試みたが、彼らの論拠は大部分が説得的なものではなかった。とりわけ彼らはマルクスのヘーゲルへの負目 [debt] すらも軽く見る傾向があったからである。レーニンの1908年の著作では、その多くがエルンスト・マッハの実証主義的諸概念への批判にあてられている。レーニンは、人間の意識から独立した客観世界の物質的存在という諸概念を論ずるのに300頁以上もついやしている。彼の様々な反対論者を観念論や折衷論だと非難することに満足せず、レーニンはあきらかに、神秘主義あるいはイギリスの哲学者ジョージ・パークレーの保守的な宗教的諸見解との必然的関連を突き止めることによって、また並行引用を活用することによって、彼らの“反動的”性格を証明することを必要不可欠だと感じている。マルクスが出典として引用されることはめったにないが、フォイエルバッハ、プレハーノフ、そしてエンゲルスからの唯物論に関する引用は沢山ある。レーニンは繰り返し自分の議論の相手側や観念論一般を、神秘主義と宗教に結びつけた。「哲学的観念論とは、秘められた、かざりたてた怪談にすぎない」（『唯物論と経験批判論』、邦訳全集215

- 216頁）と。レーニンの唯物論の極端な生硬さは、理論は客観的現実の直接の反映以上のものではないという彼のよく知られた言明に見られる。「理論を客観的実在の写し、近似的な複写とみとめること——ここにこそ唯物論がある」（同上、320頁）。レーニンはさらに、唯物論者は「人間の感覚、知覚、観念、一般に意識を客観的実在の像と見る」（同上、322頁）と書いている。これが、レーニンの模写あるいは反映の認識論としばしば呼ばれるものである。これ以外の見解は神秘主義か唯心論に落ち込むことを意味する、とレーニンは主張する。

8年後、1914 - 15年の「ヘーゲル《論理学》の摘要」で、レーニンはこのような生硬さから脱け出し、観念論と唯物論の統一としてマルクス主義を考える方向へ動く。この考え方はすでにマルクスの1844年『経済学・哲学手稿』にある考え方でもあったが、この文書はレーニンの生前には発表されなかった。この変化を示す一つの例は、ヘーゲルの〈対自有〉に関する論理学の最初の章についてのレーニンの覚書に見られる。そこでレーニンは、“観念的なもの”と“実在的なもの”は絶対的な対立物ではなく、もはや“無媒介性”と“媒介性”以上のものではないと結論づけている。これは取るに足りないことではない。というのはこれは、哲学の見通しを厳格に観念論と唯物論という“二つの陣営”への分裂という、エンゲルスやプレハーノフによって展開され、1914年以前のレーニン自身をも含む第2インタナショナル全体が従っていた考え方からの重要な前進を構成するからである。レーニンの「ヘーゲル・ノート」でこの点がどのように展開されるか、さらに注意深く吟味してみよう。まずレーニンはヘーゲルのテキスト、つまり〈対自有〉に関する章の中間から次の一節を書き取っている。「こうして総体性としての対自有の観念性は、第一に実在性に転化する、しかも一というもっとも堅固な、

もっとも抽象的な実在性に転化する」(『ヘーゲルの著書《論理学》の摘要』、邦訳全集38巻、86頁)。そこでレーニンは、上に引用した一文への明らかな回答として以下の記述をおこなっている。

「観念的なものが実在的なものに転化するという思想は、深い：歴史にとって非常に重要である。しかし、人間の個人生活においても、そこに多くの真理のあることは明らかである。俗流唯物論に反して。NB。観念的なものと物質的なものととの区別もやはり無条件的でも、度はずれ[überschwenglich]でもない」(同上)。

レーニンの上記の指摘はヘーゲルの〈対自有〉の範疇についての徹底的な説明ではほとんどないが、レーニンが彼のヘーゲル読解から自分自身のために発展させつつあったものについての重要な言明である。ヘーゲル研究を始めたばかりのレーニンが、ここで、ヘーゲル観念論にかなり公然と共鳴しはじめたのである。これは彼の1914年以前の考えとはきわめて異なっている。当時レーニンは、たしかに、エンゲルスとプレハーノフが擁護したように、カント主義に対するヘーゲルの“客観的観念論”を擁護していた。いまや単に最も偉大な観念論哲学者としてのヘーゲルの問題というだけでなく、狭い粗雑な形の唯物論を批判するためにヘーゲル観念論を利用しているという問題である。この点できわめて重要なのは、レーニンが、彼の“俗流唯物論”という呼び方のなかで、たとえばフォイエルバッハに関する第一テーゼにみられたような一面的、非弁証法的、観照的形態の唯物論に対するマルクスの批判を復活させていることである。

しばらく後、論理学に関する覚書で、ヘーゲルの著書の第2巻、本質論にたどり着いたところで、レーニンは、ヘーゲルの重要なカテゴリーである同一性(Identity)、区別

(Difference)、矛盾(Contradiction)について要約しコメントする。そしてそうすることによってまた、ヘーゲルの自己運動(self-movement)の概念を自分自身のために活用する。この議論でレーニンは、 $A=A$ ならば同時にAは非Aではあり得ないという、アリストテレスの同一律及び非矛盾律(Aristotelean laws of identity and non-contradiction)へのヘーゲルの批判を要約しそれに同意しているように見える。レーニンは覚書でこうコメントする。「だからヘーゲルは、“同一律”(A=A)……の一面性と誤謬を明らかにしている」(『ヘーゲルの著書《論理学》の摘要』、全集38巻、104-105頁)と。ヘーゲルにとって同一性は調和でなく区別に導く。レーニンは書いている。「これは機知に富み正しい。あらゆる具体的な事物、あらゆる具体的な或るものは、残余のすべてのものにたいして差異的な、しばしば矛盾的な関係に立っている、したがって、それ自身であり且つ他のものなのである」(同上、108頁)。今やレーニンはヘーゲルの“矛盾律”と彼の“自己運動”(self-movement [Selbstbewegung])概念、より一般的にはヘーゲルの“弁証法”を、ヘーゲル理解の重要な手がかりであるだけでなく、マルクス主義理解の重要な手がかりとしている。まずはじめにレーニンは“矛盾律”に関するヘーゲルの文章から5つのパラグラフを全文書き抜いている。ヘーゲルからの書き抜きは以下の文章を含んでいる。

「しかし矛盾が同一性ほど本質的で内在规定ではないかのように考えられることは、従来の論理学および普通の表象の根本的な偏見の一つである；そればかりか、仮に順位が問題とされ、そしてこの両規定が分離された規定として固守されるとしたら、矛盾はより深くより本質的なものとされねばならないであろう。なぜなら、矛盾とは反対に、同一性はたんに直接的なもの、死んだ有という規定にすぎないからで

ある。しかし矛盾はすべての運動と生動性との根である。或るものは自分自身のうちに矛盾を持っているかぎりにおいてのみ、運動し、衝動と活動性とを持っている。……さらに、矛盾はたんにここかしこに現れるといった一つの異常とみるべきものではなくて、それは、その本質的規定のうちにある否定的なもの、すべての自己運動の原理であり、この自己運動は矛盾の示現のうちに成立するものにほかならない」(同上、109 頁。強調の下線・ゴシック体はレーニンのもの)。

ここで我々は、生硬な唯物論から若干離れたところにある。重要な手がかりはたんに“運動”でなく、“自己運動”となった。そしてこの自己運動は主体の内部から発生する。こうして自己運動は外部の力ではなく、弁証法的発展と変化の中心を構成する主体の内部矛盾の安定した“流出”ないしは産物なのである。これを社会理論の言葉に置き換えれば、与えられた社会の“内部矛盾”はその社会内部の諸変化、いかえれば、自己発展と自己運動の過程として発展する諸変化をつかむ重要な手がかりなのである。

レーニンは、マルクスでなく直接ヘーゲルにこれを発見したことにたいへん夢中になる。

「運動と‘自己運動’ (これに NB! 自生的な (自立的な)、内的-必然的な運動)、“変化”、“運動と生動性”、“すべての自己運動の原理”、“運動”への“衝動”(Trieb) および“活動性”への“衝動”——“死んだ有”の対立物——、これが“ヘーゲルぶり”の核心であり、抽象的でわかりにくい (重苦しい、不条理な?) ヘーゲル主義の核心であるということを、だれが信じようか?」(同上、111 - 112 頁)

こうして運動と自己運動は事物と社会現象の内部矛盾にそれらの土台をもっている。同時に自生的で内部的に必然的なものとしてのこの運動についての彼の見解において、レーニンは、第二インタナショナルのマルクス主義の未熟なほど決定論的な諸モデルを拒否しつつある一方で、同時に歴史的及び社会的に根拠のある主観性概念と共鳴しつつある。同一性や“死んだ有”でなく、矛盾を通じての自己運動というこの概念は、レーニンにとって、ヘーゲル論理学の核心である。明らかにレーニンはこれを発見して驚いている。以下は、レーニンがヘーゲルの矛盾概念からまなびとったことをいかに総括するかを明らかにしている。

〔NB〕

(1) 普通の表象作用は、差異と矛盾とを把握するが、差異から矛盾への移行は把握しない、しかしこれは最も重要なことである。

(2) 明敏 [な思惟] は矛盾を把握し、それを言いあらわし、諸事物を相互関係のうちに入れて、“この矛盾を通じて概念を映現”させるが、諸事物とそれらの諸関係との概念を表現しない。

(3) 思惟する理性 (知性) は、差異的なものの鈍い区別、表象の単なる多様性を、本質的な区別、対立にまで鋭くする。多様性は、矛盾の絶頂にまで高められてはじめて、相互にたいし活気があり (regsam)、生きいきとしたものになり、——自己運動と生動性との内在的運動である否定性をえるのである。」(同上、113 - 114 頁)

特にここで新しい点は、知覚的には全面的に対立しているように見えるもの、すなわち一方では自生的自己運動と、他方では“思惟する理性” [denkende Vernunft] のあいだからレーニンが引き出そうとしている関係性である。矛盾は活気のない諸力のあいだだけでなく、さら

に、最も重要なものとして思惟する理性を有する人間の生命と相互作用のなかにもある。

しかし、レーニンが最も遠くにすすむのは、ヘーゲル論理学の最終部分である概念論の研究においてである。ここでレーニンは覚書の中で“二つの警句”を展開している。レーニンはこの警句の矛先を、彼が育てられた既成のマルクス主義哲学に対し、またとりわけプレハーノフに対し向けている。彼は、この警句に「現代のカント主義、マッハ主義、等々の批判の問題について」と題名をつけている。

「1. プレハーノフはカント主義（および不可知論一般）の議論を単にその入り口で拒否するばかりで、それを深め、普遍化し、拡げ、ありとあらゆる概念の連関と移行とを示すことによって（ヘーゲルがカントを訂正したように）この議論を訂正してはいないそのかぎりでは、彼はカント主義（および不可知論一般）を、弁証法的唯物論の見地からというよりもむしろ卑俗な唯物論の見地から批判しているものである。

2. マルクス主義者たちは、（20世紀の初めに）カント主義者たちおよびヒューム主義者たちを、ヘーゲル流にというよりもむしろフォイエルバッハ流に（およびビュヒナー流に）批判した」（同上、150頁）。

ここには幾つかの重要な問題がある。第一に、ロシア・マルクス主義の主要な哲学者プレハーノフに対して“卑俗な唯物論”という用語を使っている。第二に、ヘーゲリアンになるという問題がある。それ以前にレーニンは、マルクス主義者は“ヘーゲル的”な分析をすすめることが必要だろうと示唆したことはない。それまで彼はそれ以上に、マルクスを真に理解する方法としてヘーゲルを研究する必要があると指摘していた。今ここでレーニンは、カント主義批判のような若干の哲学的諸問題では、“ヘー

ゲル流の”分析が求められることを言外に示唆している。こうして、私の意見では、レーニンは20世紀のヘーゲル的マルクス主義者（Hegelian Marxist）になったのである。第三に、ここには自分の以前の見解への自己批判の力強い示唆がある。多くのマルクス主義者は反カント主義について書いてきたが、ひとりロシア・マルクス主義においてはマッハ主義が主要問題となった。レーニンとプレハーノフはロシア・マルクス主義内部でマッハを批判した二人の主要な人物であった。だから、“20世紀の初めに”レーニンが向ける“現代のカント主義、マッハ主義、等々の批判”へのレーニンの言及は、プレハーノフの著書のことだけでなく、レーニン自身の『唯物論と経験批判論』のことを指しているといっても過言ではない。

レーニンは同じ章でもう一つ警句を書いているが、これはおそらく「ヘーゲル・ノート」のなかでもっともよく引用されるところである。「警句：ヘーゲルの《論理学》全体をよく研究せず理解しないではマルクスの《資本論》、とくにその第1章を完全に理解することはできない。したがって、マルクス主義者のうちだれひとり、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかった!!」（同上、150 - 151頁）。これは、マルクス主義にとってのヘーゲルの中心性に関するもっとも劇的に明示的な言明である。さらに詳しくその意味を吟味してみよう。第一に、レーニンは「ヘーゲルの《論理学》全体」を研究するようマルクス主義者に呼びかけている。エンゲルスやプレハーノフ及び彼らの唯物弁証法についての議論で育てられたレーニンが、今や他者にたいして論理学全体を研究する際にはヘーゲルに従うよう呼びかけているのだ。それ以前にエンゲルスは、彼のもっともよく知られた哲学的著書『ルードウィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』で、マルクス主義者は唯物論的にヘーゲルの“方法”を採用する必要

があるが、ヘーゲルの“体系”は拒否する必要がある、と書いていた。レーニンはこちらでこの種の体系と方法との区別について言及していないが、レーニンの《論理学》全体の研究の呼びかけは、エンゲルスの単純な区別以上の動きとして読むことは容易であろう。第二に、この前の警句は、レーニンがカント主義やマッハ主義のようなマルクス主義のライバルとみなすものを批判するためにヘーゲルに行く必要を示唆していたが、この警句での強調点は全く異なっている。つまり、マルクス主義のなかで最も重要な理論的著作『資本論』を理解するためには、マルクス主義者は直接ヘーゲルを研究しなければならない、と。これは『資本論』全体についてもいえることであるが、ここでは「とくにその第 1 章」だと述べている。第 1 章の強調は 1914 年時点でのマルクス主義にとっては、きわめて刷新的なものである。レーニンは『摘要』において『資本論』第 1 章の商品の物神崇拜に関する部分に一度も言及していない——このことについてはルカーチが『歴史と階級意識』ではじめて強調した——が、我々はここに、経済学よりもむしろ弁証法がレーニンにとって、『資本論』の中心として、だから多分マルクス主義全体としてとも言えるだろうが、浮かび上がり始めたことを、見ることができる。レーニンにとって第三点は、今一度、自分自身の哲学的過去との、とりわけ『唯物論と経験批判論』との断絶である。論拠になるとおもうのは、先の二つの警句で、「ヘーゲルの《論理学》全体をよく研究せず理解しない」ことによって、「マルクス主義者のうちだれひとり、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかった」状況をつくりだしたマルクス主義者の中に、レーニンが自分自身をも含めているように見えるからである。私はこれを、他の理論家だけでなく、自分自身に向けたきわめて重大な非難であると解釈する。私がこのことを論じる際、部分的には、この警句と明らかにプレハーノフを批

判している警句との双方に先行して「現代のカント主義、マッハ主義、等々の批判」と記述されていることを根拠にしている。レーニンとプレハーノフのほかに、一体だれがあの当時これらの諸問題にあのように専念していたであろうか？

『論理学』に関する覚書ではしばらく後で、最後から一つ前の「認識 [cognition] の理念」の章にはいるが、ここでレーニンは彼のノートの前の数章で展開された手順を継続している。つまり、左側にヘーゲルからの長い抜粋を置き右側に彼自身の“翻訳”を置くというやり方である。ここでの彼自身の指摘は彼のもっとも遠大な言明の一つである。「人間の意識 [認識] は客観的世界を反映するだけでなく、それを創造しもある」(同上、181 頁) [このフレーズでの「意識」の英訳は cognition であり「認識」であるが、別の英語版では consciousness が使われている = 引用者]。意識 [認識] が世界をたんに「反映する」よりもむしろ“創造する”とすれば、レーニンは、『唯物論と経験批判論』の生硬な反映論から、きわめて長い距離を旅行してきたものである。ここで意識 [認識] によってもっとも確実にレーニンの意味するところは、これまでヘーゲルが「認識の理念」において展開してきた哲学的あるいは学問的な意識 [認識] であるだけでなく、革命的理論の中に具体化される意識 [認識] のタイプでもある。というのは、結局のところそれが、ヘーゲル読解におけるレーニンの焦点であり、目的であるからである。たしかに、この意識 [認識] は、レーニンにとっては物質的及び歴史的世界を意味するであろう世界を反映し描写する。しかしながら、今やレーニンが主張するように、それだけではない。意識は世界を“創造する”のだ。多くの点で、この警句は、彼の 1914 年以前の哲学的範疇の再考と再編の枠組において「ヘーゲル・ノート」全体の中で最も高い地点を占めるものである。

だが、そのときから、レーニン³は伝統的なマルクス主義的唯物論の方にやや立ち返る。「ヘーゲル《論理学》の摘要」を締めくくるページで、レーニンは、引き続き主観性に言及し続けながらも、実践と唯物論の問題にますます関心を寄せるようになる。

1914 - 15年の「ヘーゲル《論理学》の摘要」のほかに、レーニンの「ヘーゲル・ノート」のもっとも本質的な部分は、レーニンが1915年に書いたヘーゲル『歴史哲学講義』3巻に関するおよそ60頁におよぶ覚書である。レーニンの覚書はこの大著の前半部分をカバーするものにすぎないが、ギリシャ哲学に関するヘーゲルの原文テキストについてのコメントよりもむしろ弁証法に関するレーニンの一般的な言明についてのほうが注目するに値する。これらの覚書の一つの決定的な点で、レーニンは観念論と唯物論のある種の統一 [unity]、そして明らかに“賢明な観念論”の長所に賛成する議論を展開しているように見える。すなわち、「愚鈍な唯物論よりも賢明な観念論のほうが賢明な唯物論に近い。賢明な唯物論の代りに弁証法的観念論；愚鈍なその代りに形而上学的な、未発展な、死んだ、粗野な、不動なそれ」（「ヘーゲルの著書《哲学史講義》の摘要」、邦訳全集38巻、245頁）。上記の二番目のセンテンスはきわめて曖昧で、明らかに公表を意図していないテキストを分析する場合の若干の難しさを示しているが、最初のセンテンスはある種の観念論と唯物論との統一に関する著しく力強い言明である。ここでレーニンが“愚鈍な唯物論”と呼んでいるものと、彼が初期に展開したカテゴリー、“俗流唯物論”のあいだのある共通性を仮定すれば、上記のことは、第二インタナショナルのマルクス主義に対するきわめて鋭い批判と読むことは可能である。さらに重要なことに、これは、レーニンにとって未知のテキストであったが、よく知られているように、マルクスが「貫

徹された自然主義あるいはヒューマンズムが、いかに観念論とも区別され、かつ同時にこの両者を合一させる真理である」（大月国民文庫『経済学・哲学手稿』、第三手稿、222頁）とする見地を自分の見地と呼んで、観念論と唯物論の統一〔国民文庫の訳は「合一」〕を示唆したテキスト、マルクスの『1844年経済学・哲学手稿』で開かれる展望に向けたある種のさかのぼり [reaching back] をあらわしている。

覚書の次のページでもう一つの指摘がされており、そこでレーニンは、彼が分岐線として見つつあるのは、プレハーノフ型の哲学的唯物論（愚鈍な唯物論）に対するヘーゲル弁証法（賢明な観念論）であることを自分自身に明示し続ける。これはもはや、1908年当時のように、プレハーノフ哲学を受け入れながらプレハーノフの政治的結論に反対する問題ではない。ここでレーニンは、プレハーノフがヘーゲル弁証法と真面目に取り組むことができないとみなされるどんな点についても、きわめて明確に批判する。「研究すること：プレハーノフは哲学（弁証法）についておそらく千ページくらい書いた（ペリトフ+ボグダーノフ反駁+カント主義者反駁+根本問題、等々、等々）、これらのうちで、（ヘーゲルの）《大論理学》のことは、《大論理学》にちなんでは、その思想（すなわち、哲学的科学としての本来の弁証法）にちなんでは、一言も述べてない!!」（「ヘーゲルの著書《哲学史講義》の摘要」、邦訳全集38巻、246頁）。これらの記述は、レーニンがどの程度まで、初期の哲学的な諸概念の土台、ボリシェヴィズムとメンシェヴィズムの双方の主流の諸概念、すなわちプレハーノフ的哲学的唯物論と決裂しつつあったかを示している。上の記述は既成のマルクス主義への鋭い批判であり、マルクス自身の『1844年経済学・哲学手稿』の方向へ立ち返ることの指示である。しかしながら、レーニンがプレハーノフと俗流唯物論に対するこれらの批判を

けて公表しないこと、1917 年以後のヘーゲル及び弁証法に関するレーニンの著述においてさえも公表しないことに注目することもまた重要である。

この上なく注意深いレーニンが 1914 - 15 年の「ヘーゲル・ノート」について公に示唆するのは、新しい理論雑誌『マルクス主義の旗のもとに』のために書いた 1922 年の論文「戦闘的唯物論の意義について」である。この論文は 1925 年ドイツ語版ですぐあらわれた。カール・コルシュはそれより前にすでにこの論文に気づいていて、「マルクス主義と哲学」の題辞としてこの論文からの一節を使っている。この 1922 年の論文でレーニンは、ヘーゲルの主題に読者が楽に入っていけるように、自然科学の唯物論は“坊主の非開花主義”との闘争では確かに歓迎されるが、他方、…「しっかりした哲学的基礎づけがなければ、どんな自然科学、どんな唯物論も、ブルジョア思想の攻撃とブルジョア的世界観の復活とにたいする闘争をたたかいぬくことができないということを、理解しなければならない」（邦訳レーニン全集 33 巻、233 頁）と言明している。したがって、“一貫した”、“近代的”で“マルクス主義的な唯物論者”、“弁証法的唯物論者”でなければならないと、レーニンは続ける。そしてそこで、労働者階級以外の、アジアにおける反植民地民族解放闘争における新しい革命的主体についての 1914 年以後の考え方と直接関連するヘーゲル弁証法の直接的研究を、レーニンははっきりと提唱する。

「この目的を達するためには、雑誌『マルクス主義の旗のもとに』の寄稿家たちは、ヘーゲルの弁証法——すなわちマルクスが、彼の『資本論』や、彼の歴史的著作や政治的著作のなかで実際に適用した、しかもみごとに適用したあの弁証法——の唯物論的見地からする系統的研究を組織しな

ければならない。マルクスの適用はまことにみごとなものだったので、現在、東洋（日本、インド、中国）で、新しい諸階級が——すなわち、地球人口の大部分を占め、これまでその歴史的無活動と歴史的な眠りによってヨーロッパの多くの先進国における停滞と腐朽の原因となっている幾億の人々が、日に日に生命と闘争に目ざめていき、新しい諸国民と新しい諸階級が日に日に生命に目ざめていくそのことが、マルクス主義の正しさをますます確証しているほどである」（同上、233 - 234 頁）。

おそらく自分の読者がイデオロギー的根拠だけでなく、ヘーゲルを理解する難しさゆえに、懐疑的になるだろうことを感じて、レーニンは以下のようにつけ加える。

「たしかに、ヘーゲルの弁証法のこのような研究、このような解釈、このような宣伝の仕事は、きわめて困難なものであって、この点での最初の経験は、疑いもなく、誤りを伴うであろう。しかし、誤りをおかさないものは、なにもしないものだけである。マルクスが唯物論的に理解されたヘーゲルの弁証法を適用したやり方をもとにして、われわれは、この弁証法をあらゆる側面から仕上げ、ヘーゲルの主要著作の抜粋を雑誌に発表し、それを唯物論的に解釈し、マルクスにおける弁証法の適用の手本や、さらに、近世史、とくに現代の帝国主義戦争と革命とがいちじるしく大量に提供している経済的および政治的諸関係の分野における弁証法の手本によって、これに注解をくわえることができるし、またそうしなければならない。私の考えでは、雑誌『マルクス主義の旗のもとに』の編集者や寄稿家のグループは、一種の「ヘーゲル弁証法の唯物論的同好者の協会」とならなければならない。…このような任務を自分で取りあげ、そ

これを系統的にはたさずには、唯物論は、戦闘的唯物論となることができない」(同上、234頁)。

このエッセイのもっともいちじるしい特徴は、弁証法一般でなく、とりわけヘーゲル弁証法の集中的な研究と、ソヴィエト・ロシアの指導的なマルクス主義雑誌へのヘーゲルの著作の発表の公然たるよびかけである。それは、ヘーゲル・ノートで彼が展開したことについてのレーニンのもっとも完全な公然たる指示である。しかしながら、レーニンがヘーゲル・ノートで指摘した、若きマルクスへと再運動する考え方、つまり観念論と唯物論の統一(合一)というよりも、“戦闘的唯物論”のカテゴリーのもとで、それは呈示されたのである。

〈レーニンのヘーゲル読解の限界〉

レーニンのヘーゲル研究の限界の一つは、これらの研究を公表する、ないしは、彼がそこで展開したもっとも深くかつ斬新な諸概念に公開的に言及することができなかつたことに関連する外面的限界である。1914年以後レーニンは弁証法に関してしばしば公的な言明をおこなっているが、そこではときに、一方で「ヘーゲル・ノート」の新しい利点についての暗黙の言及と、他方で、マルクス主義理論のための有意義な源泉として同じノートで“俗流唯物論”と命名されているものへの称賛との、奇妙な組み合わせがみられる。ドゥナイエフスカヤは、この問題を、レーニンの“哲学的アンビバレンス”と呼んだ。そのよい例は、レーニンの1921年の冊子「ふたたび労働組合について」での弁証法に関するきわめて評価の高い章のなかに見られる。レーニンは、そこでブハーリンの「理論的才能と、あらゆる問題について理論的根源を突きとめようとする関心」(「ふたたび労働組合について、現在の情勢について」、邦訳

全集32巻、87頁)をほめちぎることによって、この弁証法に関する議論を始めている。しかし数行後で、レーニンは、「政治的契機も、経済的契機も捨ててはならない」とするブハーリンの言明を批判する。そしてレーニンは、全面性(totality)の問題を提起して、以下のように付け加えている。

ブハーリンがおかしている「誤りの理論的本質は、彼が、政治と経済の弁証法的相互関係(マルクス主義はそれをわれわれにおしえている)を折衷主義にすりかえていることにある。『それも、これも』、『一方では、他方では』——というのが、ブハーリンの理論的立場である。これこそ、折衷主義のというものである。弁証法が要求しているのは、相互関係の具体的発展を全面的に考慮に入れることであって、あるものの一片、他のものの一片を引っ張りだすことではない」(同上、88頁)。

レーニンはまた直接ヘーゲルを取り入れ、弁証法的論理学の以下のような定義を与えているが、そこで彼は上に示唆された全面性として弁証法概念を仕上げていく。

「弁証法的論理学は、われわれがもっとさきへ進むことを要求する。対象をほんとうに知るためには、そのすべての側面、すべての連関と『媒介』を把握し、研究しなければならない。われわれは、けっして、それを完全に達成することはないだろうが、全面性という要求は、われわれに誤りや感覚喪失に陥らないよう用心させてくれる。これが第一。第二に、弁証法的論理学は、対象を、その発展、『自己運動』(ヘーゲルがしばしば言っているように)、変化においてとらえることを要求する。このことは、コップについては、すぐには明らかにならない。だが、コップとて、永久に不変ではない。また、とくにコップの用途、その使用、その周囲の世界との連関は変化する。第三に、人間の実践全体は、真理の基準と

しても、対象と人間が必要とするものとの
連関の実践的規定者としても、対象の完全
な『規定』にはいなければならない。第
四に、弁証法的論理学は、『真理はつねに
具体的である』ことをおしえている……」
(同上、91 - 92 頁)。

とりわけここで注目に値するのは、ヘーゲル
弁証法への明確な言及であり、とりわけ連関、
矛盾、自己運動という、「ヘーゲル・ノート」
にある若干の重要カテゴリーの簡潔なエラボ
レーションである。

しかしながら、レーニンがそうする方法は、
ヘーゲル弁証法のレーニンによる新たな哲学的
探究にたいする彼のアンビバレンスの問題をも
提起する。弁証法的論理学についての上に引用
した論議の中で、レーニンは突然逆戻りしてプ
レハーノフを取りあげているが、プレハーノフ
は、すでに見たように、未発表のノートでは俗
流唯物論者としてほとんど斥けられていた。弁
証法的論理学に関するレーニンの第四点の記述
を全文引用すると、これがわかる。

「第四に、弁証法的論理学は、故プレハー
ノフがヘーゲルにならってこのんで言った
ように、『抽象的真理はない、真理はつね
に具体的である』ことをおしえている（つ
いでに、ここで若い党員のためにつぎの点を
注意しておくのが適当だろうとおもう。プレ
ハーノフの哲学にかんする著作のすべてを研
究——まさに研究——することなしには、自
覚ある、真の共産主義者になることはできな
い。なぜなら、これは、すべての国際的マル
クス主義文献のうちで最良のものだからであ
る）」(同上、92 頁)。

この記述のあとの脚注ではプレハーノフの称
賛が続く。

「ついでながら、つぎのことを希望せざる
をえない。第一に、いま発刊されようとし

ているプレハーノフ著作集のうち、すべて
の哲学論文を抜きだして特別の一巻もしくは
数巻にまとめ、それにごく詳細な索引そ
の他を付けること。なぜなら、それは、共
産主義の必読教科書のシリーズに入れな
ければならないから。第二に、私の考えによ
れば、労働者国家は、哲学教授がプレハー
ノフによるマルクス主義哲学の解説をまな
び、この知識を学生につたえる能力をもつ
よう彼らに要求すべきである」(同上、92
頁)。

こうして、レーニンの小冊子でのこの弁証法
の議論は、実際に興味深く刷新的なものであ
ったが、しかしながら、俗流唯物論の問題をめぐ
ってであれ、あるいはプレハーノフがヘーゲ
ル論理学の系統的研究を一度としておこなった
ことがない問題をめぐってであれ、「ヘーゲル・
ノート」で何度もおこなわれたプレハーノフ批
判のいずれにも言及することを避けている。こ
れは、ポリシェヴィキの聴衆向けの従来とは異
なる“ヘーゲルの”論拠を和らげるために、故
意におこなわれたことなのか？ 仮に誰かいたと
しても、直接的なヘーゲル研究に打ち込むよ
うになったポリシェヴィキは少ない。主に彼
らは、レーニン自身が 1914 年以前にいただ
いたように、プレハーノフ型のマルクス主義的
諸見解を唯物論であると考えていた。あるいは
レーニン自身が、弁証法をめぐる彼の新たな研
究について自分自身の頭の中ではアンビバレン
トであったのだろうか？

さらに、仲間のポリシェヴィキたちが新たな
別の係争問題に取り組むのをレーニン自身がき
らったという問題があったにせよ、あるいは、
内戦、経済再建は言うまでもなく民族問題、新
しいソヴィエト国家の官僚化、さらにロシア革
命を国際的にヨーロッパ及びアジアに拡大する
試みなどの具体的な政治的諸問題に過度に専念

していたことがあったにせよ、レーニンはある理由で、自分の弁証法研究を完結させたり公表したりすることはできなかった。レーニンはまた、弁証法についての言明にどこかアンビバレントな痕跡をのこした。労働組合論争に見られたように、弁証法に関するレーニンの公的な言明が主にヘーゲル的マルクス主義の方向へ押し進められたが、その一方で、レーニンはまた、熱烈な称賛の言葉でプレハーノフに言及することもできたのであった。これは、「ヘーゲル・ノート」でプレハーノフを一度も真面目にヘーゲルの論理学を研究したことがない“俗流唯物論者”だとレーニンがプレハーノフを特徴づけたことからすれば、一步後退である。レーニンは、このような特徴づけを1914 - 15年のノートで書いて以後、けっして公表したことはなかったのである。

1920年にレーニンは『唯物論と経験批判論』を何の変更もなしに再版することを許可した。一段落のきわめて短い第二版への序文で、レーニンはこの本が「マルクス主義の哲学である弁証法的唯物論…に通じるための参考書として、いくらか役にたつであろう」(邦訳全集14巻、12頁)との希望を表明した。意図してかどうかはともかく、「ヘーゲル・ノート」に言及しない新しい序文を付してこの本を再刊することは、レーニンの1914年以後の弁証法の考え方が何であったのかに関して、相当水を濁らせたしまった。これがレーニンの哲学的アンビバレンスの最初の例である。

レーニンの1914 - 15年ヘーゲル研究の第二の限界は、内面的なものである。これは、ノートの中の幾つかの重要なヘーゲル的諸概念についてのレーニンの一面的で不完全な解釈に見出される。一つの重要な例は、論理学の最後の一つ前の篇である「認識の理念」、そして特にこの篇の最終章「善の理念」における、理論と実践の関係性についてのヘーゲルの議論のレーニ

ンの読み方である。ここで今一度、ドゥナイエフスカヤは、決定的に重要な問題を指摘し、こう書いている。レーニンは、実践観念についてのヘーゲルの言及にひじょうに夢中になり、“実際に、レーニンをして理論の理念に立ちもどり実践理念への依存から離れるよう導いたものは何もなく”、決定的に重要なヘーゲルのテキストの一面的な読解におちいる結果になった、と。しかしながらルカーチは、理論と実践に関するヘーゲルとレーニンの議論について鋭く異なる解釈を提供する。ルカーチはヘーゲルのテキストの中に“理論的理念にたいする実践的理念の具体的優位性”を見ているとしてレーニンを称賛するが、このルカーチの議論はおどろくほど表面的である。ドゥナイエフスカヤとルカーチのこうした解釈を念頭に置きながら、レーニンの議論に立ち返ってみよう。

「ヘーゲル・ノート」のこの部分で、レーニンは、次のようにヘーゲルを読もうとしている。「実践は(理論的)認識よりも高い、なぜなら、実践はたんに普遍性という品位をもつだけでなく、直接的な現実性という品位をもっているからである」(「ヘーゲルの著書《論理学》の摘要」、邦訳全集、182 - 183頁)。一つの項目〔認識論における実践〕でレーニンはヘーゲルから次の断片を書き抜いている。

「理論的理念においては、主観的概念は、普遍的なもの、即自かつ対自的に無規定的なものとして客観的世界に対立しており、この世界から規定的な内容と充実とを取りだしてくる。しかし実践的理念においては、主観的概念は、現実的なものとして現実的なものに対立する；自己が即自かつ対自的に規定された有であることにおいて主観がもっているところの自己自身の確信は、自己は現実的であり世界は非現実的であるという確信である；……」(同上、181 - 182頁)。

レーニンを上記をたんなる理論的理念を越えた動きとして読んでいるように見える。上述のくだりは、とりわけ“世界が非現実的であること”に関する最後の部分では、きわめて観念論的な言明でもある。この言明は、実践的理念が現実的世界を否定することを示唆している。レーニンはそれを次のようにコメントしている。「すなわち、世界は人間を満足させず、そして人間は自己の行為によって世界を変えようと決心する、ということである」(同上、182頁)。レーニンにとって実践は現実的である世界に対立して立っているが、それはしかしたんに量的とか物質的とかではない。現存の社会的世界を“否定する”ところにまで“それ自身の現実性”を確信する生きた人間の主観に具現化された実践である。ここでレーニンにとって、文脈はあきらかに社会革命であるが、しかしながら、革命にとっての〈カギ〉は客観的諸力だけでなく、それ自身の現実性を悟る自己意識の主観性の発展でもある。

しかしながら、ヘーゲルのテキストの同じ部分で、レーニンはまた、数ページ後の“実践的理念の優位性を力強く評価する、次のような明確でおっきらぼうなくだりを抜き書きするのを忘れている。すなわち「…実践的理念は依然として理論的理念の契機を欠いている」〔ヘーゲル『論理学』からの引用〕というくだりである。レーニンは、このくだりや、実践的理念の限界を批判したり、理論的理念の重要性を強調する同じような幾つかのくだりのほとんどを飛ばしている。彼はヘーゲルが理論的理念の限界を批判している断片的くだりを抜き書きする一方で、ヘーゲルの実践的理念にたいする強力な批判については決して何も抜き書きしない。レーニンは、ヘーゲルの善の理念全体の議論について次のようにコメントする。

「行動の推理」……ヘーゲルにとっては行

動、実践は一つの論理的“推理”、論理学の一つの格である。そしてこれは正しい！

もちろん、この論理学の格が人間の実践を自己の他有としてもっている(=絶対的観念論)という意味において正しいというのではなく、逆に：人間の実践が何十億回となくくりかえされて、それが人間の意識のうちに論理学のもろもろの格として固定されるという意味においてである」(「ヘーゲルの著書《論理学》の摘要」、邦訳全集、185 - 186頁)。

あきらかにレーニンは、媒介としての、また抽象化された人間の思考の哲学者は彼自身のあり方として行動の哲学者であるという自分の発見にひじょうに興奮したので、ヘーゲルの提示の多面的な性質を見逃すのである。

〈レーニンのマルクス主義への 貢献の評価をめぐる若干の覚書〉

上述のすべてのことは、レーニンについてのさらに一般的な評価とどのように関連するのか？ ここで私は、理論的な理由というよりもむしろ、テーゼあるいは命題とかいうような形態をとる必然的に簡潔なコメントを述べておきたい。

上に述べたように、実践のレベルで哲学的諸問題を解決したいというレーニンの切望は、漠然としたものではなく、全体として20世紀マルクス主義を悩ました決定的に重要なポイントである。マルクス主義者は、あまりにもしばしば、あたかも実践だけが理論的政治的な諸問題を解決することができるかのように、あるいは、実践だけが新しい、解放された社会をもたらすことができるかのように行動してきたことを示唆しようとおもう。マルクス主義がかつてないもっとも深刻な危機の一つにはいったわけだから、この考え方は、特に今日においては、あまり好ましいことではない。実践に訴え

でも、それでは1989 - 91年のヨーロッパにおける共産主義の崩壊がスターリン主義的な諸集団や諸党をなぜ脱線させてしまったのかという問題だけでなく、1989年以降もスターリン主義から自己を切り離れたマルクス主義の諸要素がそれでも防御的立場に立たされてきたのはなぜか、という問題に答えられないでいる。実践に訴えても、プラグマティズムやポスト構造主義——それらのいずれも、マルクス主義が多元主義や種差性をわれわれが理解するのを妨げる総括的なディズコースであると論じているが——などマルクス主義に対抗する一連の哲学の諸要求に答えることもできない。マルクス主義が、指導的な前衛党の建設——レーニンが1914年後も執着したエリート主義的・弁証法的な考え方——も含めて、実践を通じて核心的な哲学的諸問題に答える試みである限り、レーニンのマルクス主義は、マルクス主義の今日の危機に真っ向から立ち向かううえで、あるいは危機からの出路を見出すうえで、あまりわれわれの助けにはならない。

しかしながら、レーニンのマルクス主義が今日のわれわれにとってきわめて重要になるかもしれない二つのレベルの問題がある。第一に、弁証法それ自体の問題である。ルカーチが生前、既成のマルクス主義の崩壊のあと書いているように、それは“マルクスの研究の結果を無批判的に受け入れること”ではなく、マルクス主義の核心にある“革命的弁証法”である。資本主義や帝国主義がレーニンの時代以来大きく変ったのだから、もしルカーチが正しいとすれば、「ヘーゲル・ノート」におけるレーニンの弁証法研究は、レーニンのマルクス主義の最も重要で永続的な部分となり得るであろう。その重要性は彼のマルクス主義の他の諸側面が問われつつあるとしても、きわめて良好に継承され得るものであろう。

しかしながら、第二のレベルの問題として、1914 - 17年の時期のレーニンの理論活動は全体として、現在も将来も範例として役立つものである。われわれがすでに見たように、1914年のマルクス主義の危機に立ち向かうために、レーニンは——1914年とその後の数年間革命的なインタナショナルを再建し来るべきロシアの革命を準備するために力強く活動したにもかかわらず——実践だけに頼りながら解決策を探求するのではなく、もっとも根本的な諸問題を彼の理論化努力と結びつけて再考し、再生することで解決策を模索した。われわれが見たように、レーニンは「ヘーゲル・ノート」において哲学からこれを開始した。当時の他の多くのヘーゲル的マルクス主義とはちがって、彼は哲学から政治・経済理論へと動いた。その成果は、『帝国主義論』(1916年)や『国家と革命』(1917年)のような著作に見られるとおりである。そうすることによってレーニンは、20世紀初期の諸条件に合わせて資本と国家についての新しい概念化を展開した。同時に彼は、体制の内と外での否定と矛盾の諸力についてのより新しい、より広い視野をも発展させた。こうして、レーニンの概念化においては、帝国主義の対として、その弁証法的対立物として、今日では第三世界と言われる反植民地民族解放運動がある。そして、より中央集権化され官僚化された資本主義国家の対として、ソヴィエトあるいは評議会形態での直接民主主義のための下からの要求がある。幾多の欠点にもかかわらず、1914 - 17年期のレーニンのマルクス主義の再考は行動する弁証法の見本である。今日、マルクスの伝統を継続しようと欲する人々にとって、この見本は、新しい現象を考慮に入れるためにも、創造的に根源であるヘーゲルにまですすむことによって、弁証法それ自身の再概念化と組み合わせることが求められていることを示唆しているのである。